

質問紙調査法と観察法との基礎的な比較研究

続 有 恒 塩 田 芳 久 秦 安 雄*
 鈴木 康 平** 三 輪 弘 道*** 名 倉 敬 子****

I 問題提起

本報告は、昭和40年度文部省科学研究費補助による総合研究「質問紙法に関する基礎的研究」のうちの一部門の研究経過の報告である。われわれは、つぎのような問題をまず提起した。

究明しようとする事象に関する情報を得るには、いろいろな方法があるが、それらの方法がもっている特殊性のゆえに、入手しうる情報（資料）に、おのずと、方法から規制されてくる特質が具備されることは、容易に想定されるところである。質問紙調査法もその例外ではないと考えられる。

すなわち、この方法（質問紙調査法）においては、究明しようとする事象が、被調査者の認知過程を経て、文字文章を媒介として研究者の側に情報として提供されるわけであるから、おのずと、これによって得られた情報は、被調査者の認知を通してのものであって、同時にまた、文字から成り立っている特性をそなえているといえよう。もちろん、○や×のような記号による応答の形式をもつものもあるが、それらとて、文字を媒介としての応答であることにはかわりがない。

また、質問紙調査法は、所与の集団の各成員のもっている属性なり、また、それら成員の、ある事象に対してもつ態度なりの、集団全体としての傾向を明確に把握しようとするうに効果を発揮し、また、そのようなところを主目的にして用いられることが多い方法である。

そこで、このような特性からかんがえて、質問紙調査法では、どのような事象に関して、どのような被調査者

集団から情報（資料）を得ようとするのかといった点
 が、この方法を「有効に使ううえで検討される必要がある
 といえよう。

すなわち、行動を解明するために用いられる他の方法
 によって、ある事象について、ある被調査者集団から得
 られた資料と、この質問紙調査法によって得られた資料
 の双方ともが、研究か要請するだけの精度を、同程度に
 示していることが発見されれば、事情の許す限りにおい
 て、資料が短時間に比較的多く入手できるこの方法の活
 用によって、研究の目的が、充分達成されることのうら
 づけとなるであろう。

そして、また、もし、ある他の事象については、この
 方法によったのでは、その事象についての、その被調査
 集団のもつ傾向にする十分な認識が得られないことが見
 出されれば、この方法を用いて、そのような事象を、そ
 のような被調査集団を対象として把握しようとする際に
 は、研究の所期の目的を達するために、何らかの工夫が
 試みられなくてはならないことになる。

このような視点に立つ本研究では、そこで当然、この
 方法と比較すべき他の方法がとりあげられなければならない。
 われわれは、ここにおいて、観察法をとりあげる
 こととした。観察法は、対象とする事象を、観察者の側
 の認知を通して、何らかの意味で範疇化された概念の中
 に位置づけていくものであると理解するとき、被観察者
 の認知の入りこむ余地が存在しない点で、また、被観察
 者が文字を媒介とせず、資料が提供される点で、質問
 紙調査法とは別の特性を有するものである。

本研究では、このような意味から、質問紙調査法によ
 って得られる資料と、観察法によって得られる資料とを
 比較検討して、質問紙調査法の有努な使用の方途をみつ
 けるひとつの試みとしたい。

II 方 法

II-1. 比較の次元

質問紙調査法で得られる資料と、観察法で得られる資
 料とを比較することに関して、本研究では、つぎの次元

* 日本福祉大学助教授

** 熊本大学助教授

*** 名古屋女子大学助教授

**** 名古屋大学院教育学研究科学生

註：本報告は、昭和40年度文部省科学研究費補助による
 総合研究「質問紙法に関する基礎的研究」のうちの一
 部門の班の報告であり、さらに、このうち一部は、日
 本心理学会 第30回 大会において 発表されたものであ
 る。

に焦点をあわせることとする。

まず、被調査者ないしは被観察者の認知の対象となる事象を、とりあえず二大別してみよう。

その一つは、その事象が、“外的な”，換言すれば、他人の目に映ずるもの、いまひとつは、“内的な”，いわゆる、意識、感情等のものとする。前者は、いわゆる「外部基準」の存在するものとして、実態調査などで対象とされる事象であり、後者は、意見・態度調査などで主として対象となるところの事象であると考え。そして、本研究では、まず、“外的な”事象とされる前者についてだけ、焦点をしばって、これについての両方法からの資料の比較検討をする。

II-2. 資料収集の方法

質問紙調査法と観察法とによって、ある事象についての資料をあつめるにあたって、われわれは、つぎのような点に重きをおいて、収集にあたることにした。

(1) 質問紙調査法なり、観察法なりによって資料を集める際、極く一般的には、その調査なり、観察なりを通して、明らかにしたいことがらが存在しているはずである。この研究においては、主眼とするところは、両方法の比較であるが、方法の具体的使用の状況を考える場合、やはり、明確にしたいことがら、つまり、調査なり観察なりのねらう目標を設定してかかる必要があるということ。

(2) 質問紙調査票は、できれば、同一事項を、別の、異なった表現で示したものの2種以上を用意し、質問紙調査自身のもつ、形式などから由来する問題等も考慮に入れること。

(3) 観察法は、できうるかぎり、キメの細かい情報を確保するようにつとめること。そのためには、記述の型式は、自由記述型式とするのが、この際には適当であるということ。

このような点を考慮に入れて、われわれは、研究の対象を、小学校5・6年生児童（これは、任意にそうしたものである）、調査事項は、（つまり上記(1)の観点による）「子どもの生活実態調査」、質問紙調査票は、A、B 2種（上記(2)による）、観察は、自然的観察法による自由記述型式、被観察者1名につき、原則として、1名の観察者をつけ、児童の行動の追跡記録をとらせる。（上記(3)による）

これを具体的に記すと以下の手続きの項に述べる通りである。

II-3. 手続き

1) 対象：愛知県豊田市O小学校5・6年生児童（5年生48名、6年生45名）

2) 地区の特色：上記校の児童の家庭所在地は、3地区に明確に区分され、登下校時や、帰宅後の児童の行動範囲が比較的固定している学区である。このことは、授業後の児童の行動を追跡観察する上に、かなりの助けになった。（意図的にこうした条件の学校を選んだのである。）

3) 調査・観察の目標：

「児童の生活実態調査」が目標とされたが、児童達には、もちろん研究の内容は伝えられない。ただ、観察者（大学生）が、児童とほぼ同数だけ、学区附近をあるきまわることになるので、いずれ、何かの調査をしているらしいことは気付かれるはずである。そこで、児童には、もし、彼らから、「何のために観察しているのか」ときかれたら、「地域のことに関する調査」とこたえるように統一しておいた。父兄代表その他関係機関には、O小学校の方より、事前通知をしておいてもらった。

4) 調査担当：

- a) 質問紙調査……研究班の成員2名で、1学年（1学級編成）を折半して担当。
- b) 観察……大学生（被験者1名あたり、観察者1名。各観察者はこの主担当のほか副担当として、さらに1名ずつの被験者を担当する。）

5) 調査期日：

昭和40年10月25日～27日
 5年生：25日昼食時～17時まで観察
 26日午前 質問紙調査
 6年生：26日昼食時～17時まで観察
 27日午前 質問紙調査

6) 調査事項：

①給食の献立、②給食のたべのこし、③授業中の挙手、④先生からの指名の有無、⑤帰宅所要時間、⑥帰宅経路、⑦帰宅途上の友人の数、⑧みちくさ、⑨帰宅途上出合った人、⑩帰宅途上の出来事、⑪帰宅後外出の有無、⑫帰宅後の遊び、⑬おやつ、⑭夕飯のおかず

7) 質問紙調査票A、Bと、観察記録用紙の実例

質問紙調査法と観察法との基礎的な比較研究

11. きのう、あなたは、家へ帰ってからずっと家にいましたか。

- | | | | |
|----------------|--------------|-------|-------|
| イ. はい | ロ. いいえ | だれと | どこへ |
| (1) 勉強していた | (1) お使いにいった | _____ | _____ |
| (2) テレビをみていた | (2) 自分の用でいった | _____ | _____ |
| (3) おてつだいをしていた | (3) よそで遊んだ | _____ | _____ |
| (4) ぶらぶらしていた | (4) その他 | _____ | _____ |
| (5) その他 | | | |

12. きのう、あなたは、家へかえってからどんな遊びをしましたか。

- | | | | | |
|----|---------|-------|-------|--------|
| イ. | どのような遊び | 何人位と | どこで | どれ位の時間 |
| ロ. | _____ | _____ | _____ | _____ |
| ハ. | _____ | _____ | _____ | _____ |

13. きのうのおやつは何でしたか。

14. きのうの夕ごはんにはどんなおかずができましたか。

L — S — I Form B

名古屋大学教育心理学教室

_____ 学校 _____ 学年 _____ 組 番号 _____ 名前 _____ 男 女

この調査は、みなさんの日ごろの生活をするためにおこなうものです。
 ここでは、とくに、きのう、どんなことをしたか、どんなものを食べたかなどについて下にある問いにこたえてください。テストではありませんから、ありのままを、そのまま書いてください。

1. きのうの給食には、どんなものができましたか。

- イ. すきなもの _____
- ロ. きらいなもの _____
- ハ. どちらでもないもの _____

2. あなたは、きのうの給食のとき、なにをのこしましたか。

- イ. なにものこさなかった
- ロ. のこしたものがあ

3. きのうの、5時間目の授業で、あなたは、先生の質問に、何回、手をあげましたか。

- 0回, 1回, 2回, 3回, 4回, 5回

4. きのうの、5時間目の授業で、あなたは、先生からあてられましたか。

- 0回, 1回, 2回, 3回, 4回, 5回

5. きのう、学校から家にかえるまで、およそ何分かかりましたか。

- およそ _____ 分

質問紙調査法と観察法との基礎的な比較研究

		(1)	(2)	(3)	(4)
遊びの名前					
人数	男の子	人			
	女の子	人			
時間	どれくらいの時間				
場所	家の外				
	家の内				

13. きのおやつは何でしたか。
 イ. きのおは, 何もなかった
 ロ. おやつを食べた

14. きのお夕ごはんには, どんなおかずができましたか。

つぎに, 観察記録用紙の実例を示す。

観 察 記 録 L - S

O 小 5・6年 観察者氏名 所属大学名
 被観察者氏名 男・女 (地区の名)

1. 給食 (12:15~13:30)

食べのこしたもの _____

2. 5時限 (13:30~14:15)

a. 挙手した回数 () 回

b. 指名された回数 () 回

答えられたかどうかなど目立った言動

()

3. 授業後 (14:15~17:00)

a. 校門を出た時間 _____時_____分 所要時間

b. 帰宅した時間 _____時_____分 () 分

c. 校門を出る時いっしょだった人数

クラスの友人	クラス以外	兄 弟	計																			
<table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%;">男 人</td> <td style="width: 50%;">女 人</td> </tr> <tr> <td style="width: 50%;">男 人</td> <td style="width: 50%;">女 人</td> </tr> </table>	男 人	女 人	男 人	女 人	+	<table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%;">男 人</td> <td style="width: 50%;">女 人</td> </tr> <tr> <td style="width: 50%;">男 人</td> <td style="width: 50%;">女 人</td> </tr> </table>	男 人	女 人	男 人	女 人	+	<table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%;">男 人</td> <td style="width: 50%;">女 人</td> </tr> <tr> <td style="width: 50%;">男 人</td> <td style="width: 50%;">女 人</td> </tr> </table>	男 人	女 人	男 人	女 人	=	<table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%;">男 人</td> <td style="width: 50%;">女 人</td> </tr> <tr> <td style="width: 50%;">男 人</td> <td style="width: 50%;">女 人</td> </tr> </table>	男 人	女 人	男 人	女 人
男 人	女 人																					
男 人	女 人																					
男 人	女 人																					
男 人	女 人																					
男 人	女 人																					
男 人	女 人																					
男 人	女 人																					
男 人	女 人																					

総 合 研 究

d. 家のすぐそばまでいっしょだった人数

クラスの友人		クラス以外		兄 弟		計																
<table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td style="width: 50%;">男</td><td style="width: 50%;">人</td></tr> <tr><td>女</td><td>人</td></tr> </table>	男	人	女	人	+	<table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td style="width: 50%;">男</td><td style="width: 50%;">人</td></tr> <tr><td>女</td><td>人</td></tr> </table>	男	人	女	人	+	<table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td style="width: 50%;">男</td><td style="width: 50%;">人</td></tr> <tr><td>女</td><td>人</td></tr> </table>	男	人	女	人	=	<table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td style="width: 50%;">男</td><td style="width: 50%;">人</td></tr> <tr><td>女</td><td>人</td></tr> </table>	男	人	女	人
男	人																					
女	人																					
男	人																					
女	人																					
男	人																					
女	人																					
男	人																					
女	人																					

4. 途 中

a. より道した場所

- イ. _____
- ロ. _____
- ハ. _____
- ニ. _____

b. 途中でであったかかった出来事, およびそのときの状況当人の言動など

- イ.
- ロ.
- ハ.

c. 途中でであった人, およびそのときの言動

- イ.
- ロ.
- ハ.

5. 帰宅後

a. よそへ出かけなかった

b. よそへ出かけた

- イ. _____時_____分
- ロ. 誰と 大人 男_____人・女_____人
友人 男_____人・女_____人
- ハ. どこへ(どこで) _____
乗りもの・携行品など _____
- ニ. どんなことを(お使い・遊び・塾など)
そのときの状況をできるだけくわしく。(性別の人数などは必ず記入する。)

ホ. やめたとき _____時_____分

注: お使い・遊び・塾などの行動移動, 遊びの種類・場所などの移動があったときは, 時間経過にしたがって, 上記の基準で記入。

II-4. 調査の実施状況

調査の実施に際しては, 前述のとおり, まず, 観察, そして, その翌日に質問紙調査を実施した。

さて, 観察は, 前にも示したように, 1人の観察者が, 1人の被験者を観るということにしたが, つぎのよ

うなことを考慮して, もう1人の児童を副被験者として, うけもつようにデザインした。つまり, ひとつには, 教室内のように, 比較的, 児童の行動範囲がせまく限定されているところでは, しかも, 本研究の教室内観察項目のようなものであれば, 1人の観察者で2人の児

質問紙調査法と観察法との基礎的な比較研究

童をみるのも可能であろう。観察しにくい場合はやむをえないとしても、余力があれば、2人を見ることにした方が、資料の信頼性照合のための一助ともなるものがえられようという点があげられる。また、べつのひとつの点としては、観察の対象児を1人に限定しておくことは、とくに、戸外観察の場合には有効なことであるにちがいない。しかし、本研究の場合、当日、初対面の児童の追跡をするわけである。もし、校門を出るより前に、見失うことがあると、どうしようもなくなってしまおう。その時には、もし、別の1人が副対象としてあれば、その欠陥をうめあわせられようと考えてのことである。

実施にあたり、教室内の行動は廊下から、観察をおこない、下校（帰宅）開始以降の行動は、児童が、帰りにけにクツをはくところを、下駄箱の近くで待機していて、該当児童をみつけて、追跡するように指示した。

ところが、いざ実際の場になってみると、われわれの予想が、いささかはずれたところがでてきた。

すなわち、教室の中での行動は、2名の児童を1人の観察者が難なく観察するだろうと思ったところ、割合困難がともなった。というのは、廊下に50余名の観察者が並んでしまったため、主観者だけをおうのがやっとなかったという観察者が多く出たという点と、いまひとつは、下校時以降の、副観察者の追跡は、ほとんど不可能であって、主観者児童を見失ってしまったものが、副観者児童をかわりにみつけて追跡することは、とてもむずかしいものであったという点とである。それは、児童が、下校時一斉に下駄箱に殺到し、潮の引くごとくさつと運動場から、校門の方へ去ってってしまうので、一たん観察対象児を見失ったら仲々つかまらないのが実

状であった。もちろん、大部分の観察者は、主対象児を見つけて尾行追跡をした。（途中見失なった観察者も、家を尋ねあてて下校、帰宅後から観察を再開したのものもあった）

さて、帰宅してから、いったんカバンをおいて、再び外に出て遊ぶ児童については（このような児童が大部分であったが）、観察者は、さらに、かれを追って、遊ぶ場所なり、遊ぶ様子を記録したのであるが、なかには、家に入ったまま、観察打ち切り時刻5時まで、とうとう現われなかったり、せっかく出てきても、自転車にのって、どこへやら出かけてしまった児童もあったとの報告をうけている。これらは、数の上では多くはなかったが、帰宅後の行動にもなら規制を加えることなくおこなう研究である以上、当然予想はされていたところであった。

つぎに、その翌日の質問紙調査について記すと。

観測者と同種の、あるいは同一の人（つまり大学生）が、質問紙調査も実施するとなると、質問の内容からして、不自然になることをまぬがれないので、研究班員のうち、任意の2名が担当をした。2名で1組を半分ずつうけもって調査票に記入させたのであるが、1組を2分した理由は、Form A と Form B との順を、相互に入れかえて実施をして、系列効果の相殺をねらったものである。記入に、調査者が一項目ずつゆっくりと読みあげてそれにあわせてやらせた。

III 結 果

(1) 各項目ごとの概観

(1) まず、給食のたべのこしの有無についてみてみよう。6年生では、方法間に比較的高い合致度のある資料

第 1 表 給 食 (たべのこしの有無)

方法 学年 性別 など	A — B		A — O		B — O	
	5 年	6 年	5 年	6 年	5 年	6 年
	男女計率	男女計率	男女計率	男女計率	男女計率	男女計率
無—有 有—有 合 致	10 10 20 81.25	12 3 15 86.56	12 9 21 62.50	13 3 16 91.11	10 7 17 56.25	11 3 14 82.22
無—有 有—無 不 一 致	1 2 3 10.42	2 2 6.67	1 3 4 31.25	2 8.89	3 3 31.25	2 2 11.11
そ の 他	3 1 4 8.33	3 3 6.67	2 1 3 6.25		4 2 6 12.50	3 3 6.67

〔註〕 A： 質問紙調査 Form A
 B： // Form B
 O： 観 察
 数値は件数（人数）
 （全部の表を通じて同じ）

が得られている。5年生では、観察と質問紙との間に6年生ほどの合致率がないが、それについては、「たべのこしがある」と質問紙に答えているのを、観察では「なし」とされた資料がその不一致の大部分を占めている（第1表 A—O, B—O, 有—無不一致, 5年生の欄参照）ことがみられる。

そのようなくいちがいについては、質問紙への応答で「自分は食べ残したが、それを人にやってしまった」という記述が付けられているものが、それらくいちがいの資料の中に数例あったことに注目しておきたい。

(2) 授業中の挙手については、「挙手をした」か、「しなかった」かだけについては（つまり, A—O), 6年生では両方法の間に高い合致率が示されている。しかる

に, 5年生では, 60%強の合致率にとどまり, 6年生のそれを20%も下回っている。これは, 5年生の授業観察のしかたの不備が原因となったと思われる, 2割もの観察不能を出してしまったことに原因があると推定される。観察不能で, 両資料の比較不可能なものを除いてみると, 78%余う合致率がえられている。（もちろん, この合致率が, 6年生のそれと直接比較の対象にはならないが）

一方, 「挙手の回数」についてみると, 「B—O」欄で示されている通り, 児童たちは, 観察された回数より多くの回数を質問紙に回答する（あるいは, 児童の報告よりも, 観察者の記録の方が下回る）傾向があることがよみとれるのは興味深いところである。

第 2 表 授 業 中 の 挙 手

比較	方法 学年 性別など	A — B				A — O											
		5 年		6 年		5 年		6 年									
		男	女	計	率	男	女	計	率								
挙 — 挙 挙げず — 挙げず	合致	20	22	42	95.83	24	15	39	95.56	13	14	27	60.42	21	12	33	80.00
挙 — 挙げず 挙げず — 挙	不一致	1	1	2.08		1	1	2.22		4	2	6	16.67	2	2	4	11.11
そ の 他		1	1	2.08		1	1	2.22		3	8	11	22.92	3	1	4	8.89

B — O								
〔差〕 ↓	5 年	6 年						
	男	女	計	率	男	女	計	率
+5~	1	4	5	10.4				
+4	1	1	2	4.2				
+3	5	2	7	14.6	2	2	4.4	
+2	1	1	2	4.2	6	1	7	15.5
+1	3	3	6	12.5	2	5	7	15.5
0	1	3	4	8.3	10	10	20	44.4
-1	4	1	5	10.4	3	2	5	11.1
-2		1	1	2.1				
-3	2	1	3	6.3				
-4	1		1	2.1				
-5	1		1	2.1				
不 明	3	8	11	22.9	3	1	4	8.9

質問紙調査法と観察法との基礎的な比較研究

(3) また、授業中の指名についてみると、挙手の場合と似たような傾向が示されていることがわかる。しかし、挙手の場合とはちがった顕著な点がある。それは、「B-O」の欄で、指名された回数が、観察記録と、質問紙の応答とが、相当に高い合致率を示していることであろう。この原因は、「挙手」は授業中に何回もする

が、指名は、そんなに多くはされなく、1人1人よくおぼえているからであろうとも考えられるし、あるいは、挙手より指名されることの方が印象が深いことであるためとも考えられるが、いずれにしても、われわれの得た資料からだけでは決めがたい。着目はしたい点である。

第3表 授業中に指名されたこと

比較	方法		A — B				A — O										
	学 年	性別など	5年		6年		5年		6年								
			男	女	計	率	男	女	計	率	男	女	計	率			
指 — 指 指されず — 指されず	合致	14	14	28	87.50	21	19	40	93.33	10	6	16	58.33	18	18	36	80.00
指 — 指されず 指されず — 指	不一致	1	2	3	6.25	1	1	2	2.22	2	3	5	18.75	3	1	4	15.56
そ の 他		1	2	3	6.25	2	2	4	4.44	3	8	11	22.92	2	2	4	4.44

〔差〕	B — O			
	5年		6年	
	男	女	計	率
+5~				
+4				
+3	1	1	2	2.1
+2	1	1	2	4.2
+1	5	3	8	16.7
0	9	11	20	41.7
-1	1	2	3	6.3
-2	1	1	2	2.1
-3				
-4				
-5				
不明	4	9	13	27.1

(4) 校門を出る時の仲間の人数について第4表をみよ。みよう。

給食のことや、挙手のことなどと同様、質問紙相互のA、B型式ともに、よく合致した傾向を示しているが、観察結果とは必ずしも高い合致率を得ていない。しかし、この場合、とくに「A-O」の欄を注目して気づくことは、授業中の挙手・指名の場合とは逆のような傾向がうかがえることである。つまり、観察者による記録の

方が、質問紙への応答の人数よりも、上回る傾向にあることがみられることである。

これは、児童自身（当事者自身）の、「仲間」の大きさ（グループの大きさ）の認知と、部外者と観察者の認知とがくいちがっていることのあらわれとみられないであろうか。有機体としての「人」の単なる集まりと、「仲間」として認知された集まりの違いがあらわれていると考えてみよう。

第 4 表 校門を出る時の仲間の人数

方法 学年 性別など 差(人)	A — B								A — O								
	5 年				6 年				5 年				6 年				
	男	女	計	率	男	女	計	率	男	女	計	率	男	女	計	率	
5~													1	1	2.2		
4														1	1	2.2	
3					1	1	2.2			2	2	4.2					
2					1	1	2.2										
1	1	1	2	4.2	1	1	2.2			5	1	6	12.5	6	6	13.3	
0	20	26	46	95.8	20	18	38	84.4	7	11	18	37.5	9	13	22	48.9	
-1					1	1	2	4.4	2	3	5	10.4	4	5	9	20.0	
-2					1	1	2.2			1	2	3	6.3	1	1	2.2	
-3					1	1	2.2			1	1	2.1					
-4									1	1	2.1						
-5~									1	3	4	8.3					
不 明									4	4	8	16.7	5	5	11.1		

(5) つぎに、よりみちの有無であるが、これは第5表をみてわかるように、全体的に合致率が高い。これは、「よりみち」のもつ性格、特質からくるというよりは、この調査地区の特質からくるという方が妥当であると考えられる。それは、帰宅経路が非常に単純であることから、観察者にも、被験者の「よりみち」行動の有無が

簡単に見てとれたという点にあるというわけである。(ここでも、5年生のA-O、B-Oの合格率の低いのは、対象を見失ったり、途中から児童においついたりして、帰途全般にわたる報告ができなかった観察者が2割強いたためであろう)

第 5 表 よりみちの有無

方法 学年 性別など 比較	A — B				A — O				B — O															
	5 年		6 年		5 年		6 年		5 年		6 年													
	男	女	計	率	男	女	計	率	男	女	計	率	男	女	計	率								
無 — 無 有 — 有 合 致	18	26	44	91.7	25	18	43	97.8	13	20	33	70.8	24	18	42	95.6	14	21	35	72.9	24	19	43	97.8
無 — 有 有 — 無 不 一 致	1	1	8.3			2.2			1	1	6.3			2.2			4.2							
そ の 他									5	6	11	22.9	1	1	2.2	5	6	11	22.9	1	1	2.2		

(6) 帰宅途上に会った人の有無については、第6表をみながら考えてみよ。

顕著なことがらとして目につくことは、質問紙調査票への応答に関しては、A型B型いずれへも共通の答えを出している。つまり、A-Bの合致率が相当高いのに、観察による資料と、質問紙のそれとのつき合わせは、その合致率の低さを示している。このことはある程度予想されたところではあった。すなわち、「校門を出る時の

友人、兄弟の数」といった事項と同じく、「知っている人」に合ったかどうかという事項は、まさに、被験者の側の認知によって応答がきめられるといっても、この場合(本研究の場合)には、過言ではなからう。観察者としては、被験者が、その人を知っているか否かについては、それこそ、外的行動をたよりに推測する以外、この場合には、手だてがないからである。

質問紙調査法と観察法との基礎的な比較研究

第6表 帰宅途上出会った人の有無

方法 学年 性別など	A - B	
	5年	6年
	男女計率	男女計率
比較		
会—会(知)	2 4 6	2 2
会—会(未・知)	1 1	9 8 17
不—不	6 4 10	1 1 2
不—会(未・知)	12 18 30	14 8 22
会—不		
会—会(未)		2 2 4.4
不明	1 1 2.1	

方法 学年 性別など	A - O	
	5年	6年
	男女計率	男女計率
比較		
会—会	1 2 3	5 6 11
不—不	13 16 29	14 4 18
不—会	1 1	5 5
会—不	2 2	6 1 7
不明	7 6 13 27.1	1 3 4 8.9

方法 学年 性別など	B - O	
	5年	6年
	男女計率	男女計率
比較		
会(知)—会	1 3 4	5 6 11 1 1 2 13 3 16
会(未・知)—会	3 2 5	
不—不		
会(未)—不	10 11 21	64.4
会(知)—不	2 2	2 2
会(未・知)—不	2 2	
会(未)—会		2 2
不明	7 7 14 29.2	1 2 3 6.7

(註) 会……………知ってる人に会った
 会(未)……………未知の人に会った
 会(知)……………知ってる人に会った
 会(未・知)……………知らない人にも知ってる人にも会った
 不……………会わなかった

(7) 帰宅所要時間について、質問紙A、B型式、相互観察記録とA、Bとの時間の差をみたのが、第7表である。表側は、1分間隔にとってあるが、±5分位の誤差範囲の中にほとんどの被験者が入ってしまっている。この種の質問項目への応答は、おそらく児童たちにとって

第7表 帰宅所要時間(方法間の時間の差)

方法 学年 性別など	A - B		A - O		B - O	
	5年	6年	5年	6年	5年	6年
	男女計率	男女計率	男女計率	男女計率	男女計率	男女計率
差(分)						
6~			1 3 4 8.3	3 3 6 13.3	1 1 2 4.2	2 3 5 11.1
5		1 1 2.2	4 2 6 12.5		2 4 6 12.5	
4			3 3 6.3	1 1 2 4.4	3 3 6.3	2 2 4.4
3	2 2 4.2	1 1 2.2	1 4 5 10.4	3 3 6 13.3	1 2 3 6.3	2 1 3 6.7
2	1 3 4 8.3	2 2 4.4	2 2 4 8.3	6 6 12 26.7	4 1 5 10.4	5 5 10 22.2
1	1 1 2.1	1 1 2.2	5 5 10.4	1 2 3 6.7	4 4 8.3	2 2 4 8.9
0	14 23 37 77.1	21 15 36 80.0	3 3 6 12.5	6 1 7 15.6	4 3 7 14.5	5 1 6 13.3
-1	1 1 2.1	1 1 2.2	1 1 2 4.2	2 2 4.4	1 1 2.1	3 3 6.7
-2	1 1 2 4.2	1 1 2.2		2 2 4.4	1 1 2.1	3 2 5 11.1
-3		1 1 2.2	2 2 4.2	1 1 2.2	2 2 4.2	2 2 4.4
-4			1 1 2.1	1 1 2.2	1 1 2.1	
-5		1 1 2.2	1 1 2.1	1 1 2.2	2 2 4.2	1 1 2.2
-6~					2 2 4.2	2 2 4.4
不明	1 1 2.1		6 3 9 18.8	1 1 2 4.4	6 3 9 18.8	1 1 2 4.4

みれば、日常のこととして一定の答えをもっているであろう。また、正味の所要時間も短く、10分～15分前後である。

第8表 遊びの数

方法 学年 性別 数	A		B	
	5年	6年	5年	6年
	男	女	男	女
	数	数	数	数
7				1
6		2		
5	2 1	2 3	2 1	3
4	1 1	2 6	6 11	9 9
3	2 11	12 3	4 5	8 4
2	8 10	3 4	8 7	2
1	7 4	7 1	1 3	6 1
0	1			1 1

(8) 遊びについて、まず第8表と9表をみよう。ともに質問紙調査への応答である。

第8表は、遊びの数、9表は遊びの数の差をみたものであるが、これらによると、B型式のきき方をした方が、遊びの数は、A型式のそれよりも、たくさん出てくることが見られよう。

ところで、ここにはA-O、B-Oの比較が出してな

第9表 遊びの数の差

方法 学年 性別 差	A - B							
	5年				6年			
	男	女	計	率	男	女	計	率
3					1	1	2	4.4
2								
1	1	1	2	4.2		4	4	8.9
0	7	12	19	39.6	15	5	20	44.4
-1	4	8	12	25.0	5	3	8	17.8
-2	3	3	6	12.5	1	3	4	8.9
-3	2		2	4.2				
それ以外	14	3	7	14.5	4	3	7	15.6

い。それは、われわれが手続き上、ひとつの失敗をおかしてしまったからである。つまり、観察うちり時刻を5時と定めて、その時までの観察記録を得たのにかかわらず、質問紙調査票の中の質問項目には、「きのうの5時まで」などという制限は設けずにきいているから、直接比較できなくなってしまったわけである。

しかし、それにもかかわらず、われわれは、有益な資料を得ることができたと思っている。二、三を例示して、その一端を示しておこう。

第10表 遊びについての例

		A	B	A	B	A	B	
5年男子 (A)	遊び	ボール投げ	ドッチボール	ブランコ			すべり台	
	人数	2	1/2	3			1/2	
	時間	30分	30分	1時間			10分	
	場所	お宮	お宮	広場			遊園地	
		O →						
5年男子 (A)	遊び	ネコとあそぶ トウロウをト ビコス	ネコとあそぶ 木にブラサガ ル	話 し	話 し ボール投げ	—?	スベリ台 ブランコ	馬のりを みる
	人数	1/0	1(6年)	1(6年)	1+1-1 1(6年)	1(妹)	1(妹)+1(6年)	不 明
	時間	6分	14分	21分	38分	4分	36分	15分以上~
	場所	神明社	〃	公園	神明社	〃	〃	〃

(→上段男子)
(→下段女子)
以下同じ

質問紙調査法と観察法との基礎的な比較研究

		A	B	A	B
5年女子 (B)	遊び	石けり	石けり	いっすんとび	高とび
	人数	3	1/2	5	0/5
	時間	20分	20分	20分	30分
	場所	広場	〃	〃	〃

		O →							
5年女子 (B)	遊び	犬と遊ぶ	石けり	ゴムとび	ふざけ合い	石けり	顔かき	話し	話し (イモをタベナガラ)
	人数	不明	1/2	1/2+2	1/4	0/3	0/3	1/3	0/3
	時間	3分	10分	34分	7分	35分	1分	19分	10分
	場所	ウラのアキ地	〃	〃	〃	〃	〃	家の前	〃

		A	B	O →
6年男子 (C)	遊び	プラモデル	プラモデル	16時45分現在まで 外出しなかった
	人数	2	2/0	
	時間	30分	30分	
	場所	自分の家	〃	

		A	B	A	B	A	B	A	B
6年女子 (D)	遊び	ストップ	ストップ	ぶらんこ	ぶらんこ	はじめのいっぽ	はじめのいっぽ	1歩	1歩
	人数	6	0/6	4	0/4	8	0/8	6	0/6
	時間	15分	20分	10分	10分	30分	30分	10分	15分
	場所	遊園地	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

		O →								
6年女子 (D)	遊び	ブランコ 話しながら	〇〇商店でアイスクリームをかき公園でたべる	犬と遊ぶ	石けり	丸をかいて片足でとぶ	ストップ	スベリ台で話す	〇〇商店へアイスクリームをかきにいく	たべる
	人数	0→2 4→7	0/3	0/3	0/6	0/6	0+1/6	0/2+4	0/3	0/6
	時間	16分	7分	14分	不明	25分	29分	8分	不明	不明
	場所	遊園地	〃	水〇ま〇子の家で	遊園地	〃	〃	〃	すぐ遊園地へもどる	遊園地

これらの例でも、その片鱗がうかがえるように、児童がいうところの「遊び」と、観察者のみる「遊び」の単位、構造、仲間の数などが異っている点興味のあるところである。全く任意にえらび出した例で、体系だててこれといえるようなものをもたないが、このような「応

答」と「観察資料」との、より精密な採取と分析が望まれるところである。

② 観察者相互の観察資料の合致度

第11表は、この研究に参加した観察者の、観察の一致性をみるために、まとめてみたものである。主観察者と

総 合 研 究

第 11 表

観 察 者 相 互 の 合 致 ・ 不 一 致

項目	対 比 学 年 差	主 ・ 副 観 察 者 の 資 料 比 較							
		5 年				6 年			
		男	女	計	率	男	女	計	率
給 食	た べ の こ し								
	無—無 有—有 } 合 致	3 1	6 2	9 3	12 25.0(85.7)	8 7	1 12	9 19	28 62.2(96.6)
	有—有 [^] 無—有 } 不 一 致					1		1	2.2(3.4)
	不 能	17	17	34	70.8	10	6	16	35.6
挙 手	回 数 の 差								
	± 2 ± 1		1	1	2.1(10.0)	1 3		1 5	2.2(3.7) 11.1(18.5)
	0	4	5	9	18.8(90.0)	10	11	21	46.7(77.8)
	不 能	17	21	38	79.2	12	6	18	40.0
指 名	回 数 の 差								
	± 2 ± 1		1	1	2.1(8.3)	1		1	2.2(3.6)
	0	4	7	11	22.9(91.7)	13	14	27	60.0(96.4)
	不 能	17	19	36	75.0	12	5	17	37.8
校 門 を 出 た 時 の 友 人	人 数 の 差								
	± 3 ± 2 ± 1		1 2 1	1 2 1	2.1(9.1) 4.2(18.2) 2.1(9.1)	2	3	5	11.1(35.7)
	0		7	7	14.6(63.6)	6	3	9	20.0(64.3)
	不 能	20	17	37	77.1	18	13	31	68.9
	帰 宅 所 要 時 間	時 間 の 差 (分)							
± 5 ± 4 ± 3 ± 2 ± 1						1		1	2.2(6.3)
						2		2	4.4(12.5)
			2	2	4.2(22.2)	2	1	3	6.7(18.8)
			2	2	4.2(22.2)	1	2	3	6.7(18.8)
0		1	4	5	10.4(55.6)	5	2	7	15.6(43.7)
不 能		20	19	39	81.3	15	14	29	64.4

(註) 不能：副観察者が観察不能となった事例

() 内パーセントは、便宜的に「不能」欄実数をのぞいたものを全数(分母)とした場合の率

副観察者の資料の間の合致度であらわしてみた。副観察者が、自分のうけもった主被験者の追跡、観察に手いっぱい、「不能」が多くなってしまい、合致度をみるための資料としては、十分ではないと反省をしている。

そして、まったく便宜的ではあるが、「不能」な事例をのぞいて、観察ができた主・副観察者についての合致率を出してみたのが表中の括弧の中のパーセントである。これらを見ると、すくなくとも、それらの間には、相当高い合致率があるといってもよさそうである。

IV むすび

以上、本研究の結果を概観し考察を加えてきたが、われわれの所期の目的にてらしてみても、どのようなことが得られたであろうか。以下に挙げてみたい。

(1) まず、調査の標題として掲げた「児童の生活実態調査」という点では（これは、はじめに述べたように、本研究の目的そのものではないが、一応、調査の目標として立てたものであるから、その目標に沿った質問紙調査法という限定をおいて考察されなければならない。）、やはり、「両方法の比較検討」の方が先に立ち、それを主眼にしたために、必要と認めつつも割愛してしまったような質問事項、あるいは、とくに比較のために設けられたような特殊な質問項目もある。しかし、本調査において、児童の、とくに下校時あたりから、その後にかけての子どもの主要な生活活動（戸外）を把握する方法について、いくつかの重要な知見を得ることができたと考えている。

(2) 質問紙調査法による場合、質問の形式が応答を左右することがありうることがみられた。とくに顕著な差のある事項については、その時に触れたが、これについての体系的な検討が、今後望まれるところである。

(3) 観察法においては、たしかに、外面的な行動の把握における精度は高いものをもっていることが推定される資料が得られているが、この観察法で外面的行動の把

握にあたる時でも、その行動なり事象なりが、観察者の側に「知識」としてとりいれられていない場合には、その精度はいちじるしく低下することもまた明らかとなった。例えば、下校時、何人で帰ったかのような事象については、観察法では十分に精度が高まる可能性のあるところだが、それが、ひとたび、その場合同級生は何人だったか、兄弟姉妹は何人だったかと問いつめられると、精度は低くなってしまふ。また、帰宅途上出合った人で、被験者が知っている人、知らない人などの区別などになると、相当、難しいことになってくる点なども、これに相当するところであろう。当然のことといってしまうえばあるいはそれまでかもしれないが、だからといって、この種の事象については、質問紙によるのがよいとは早急に結論づけられぬ点もあり、両方法のもつ特質の一端を知らしめてくれるようなところであった。

(4) そこで、両方法の比較を、とにかく、まず手始めとして外部基準の存在という次元で試みてみたところの当初の結論としては、小学校5・6年の児童について、外部基準のあるものについてだけからなる生活実態を把握する上で、両方法の合致率が、どのような項目に対しても、一定の率を保っているとはいえないことが見出された。むしろ、相当な巾があるといった方が適切ですらある。そこで、外部基準のあるものといっている事象を、もっと、より一般的な水準で、段階づけてみる必要——あるいは特性づけてみる必要がある。そうすることは、ひとり外部基準をもつ事象のみにとどまらず、「外部」「内部」の概念上の境界を越えて、何らかの構成概念をもって、それらを一次元化することにつながっていく。また、そうすることによって、どの辺の深さの事象を把握するためには、質問紙調査法ではこれこれの質問形式、観察法では、かくかくの観察の仕方が望ましいという提言などが可能になるような道へ近づくことになるかと憶測もされるのである。